



人生経験が気づきの原動力となっていることが語られた。また『コミットメント』では「本当に言いたいことは他に何かあるはずって考えて、話を聞いたりその後を観察してみます」と自己表出が苦手とされる精神疾患患者に向きあい、常にその人の内面世界を理解しようと寄り添い続けることが気づきの原動力となっていることが明らかにされた。

- 2) 「患者のケアに発展していく気づき」とは、看護場面でケアに必要な患者理解への手がかりとして発展していく気づきのことである。これは、『人的環境が患者に与える影響への気づき』『ケアの優先順位への気づき』『患者に起こりうるリスクの視点を持った気づき』『患者の言動の意味への気づき』『患者のストレスに目を向けた気づき』の5つの中カテゴリーが抽出された。

『患者の言動の意味への気づき』には、「多分母親に似ているって言葉を聞いてからだと思うんですけど、お母さんはどんな人？とか色々聞いたら自分がしんどかった家庭のことを言いはじめて、泣いたというか表出できていた感じです。素直な感じ。ナースへの攻撃性も泣いたことでちょっと落ち着いて」と語られたように、それまで看護師に激しく攻撃性を向けていた患者の言動を手がかりにしていねいに向きあい〔患者から受けた言葉からかかわりの方向性を見出す〕という気づきが、患者の思いに寄り添うケアに発展することが明らかにされた。

- 3) 「自己への気づき」とは、自己洞察を「気づきを生み出す看護力」に反映していくものである。これは『ケアの評価』『自分の感情が伝わる』『自己の看護を振り返る』『チームで陰性感情を共有する』の4つの中カテゴリーが抽出された。

『自分の感情が伝わる』では「患者さんに“顔は笑っているけど、心は冷たいね”と言われたことがあって、その患者さんは嫌だなという思いが強くあったから、そういう感情って伝わるんだなと感じた」と看護師の陰性感情が患者に伝わるという体験を経て、感情のコントロールの必要性を認識しているようすが明らかにされた。そのために「他のスタッフにあの患者はたまらんねって、しんどい気持ちを出して、自分のストレスを解消する」と『チームで陰性感情を共有する』ことによって、感情のコントロールをはかり、自己を洞察し、気づきを深めていることが明らかにされた。

## VI. 考 察

【精神科看護師の気づき】は、「気づきを生み出す力」「患者のケアに発展していく気づき」「自己への気づき」から成り立っており、これらは相互に関連し、思考過程として循環しながら新たな看護実践につながっていくと考えられた。

本研究の対象者は「気づきを生み出す力」に基づく観察やコミュニケーションを通して、表面化されない部分を察知し「患者のケアに発展していく気づき」を得ていた。

J. トラベルビーは「他人からの手がかりを観察することによって、それぞれのひとは知覚したり、他人に感情や印象を伝えたりするのである。そこに関与している人々の感受性と受容性次第であるが、他人の根底にある意図を感じるとかあるいは知覚する能力を含んでいるように思われる」<sup>1)</sup>と述べている。本研究においても対象者は、知識や経験だけでなく、感受性や受容性を用いて手がかりを得て、それを観察することで『患者の言動の意味への気づき』につながっていると考えられた。

さらに患者－看護師関係に限らず、他のスタッフをも含めた対人関係を通して自己洞察を深めていることが明らかにされた。「自分自身を治療的に用いるには、自己洞察、自己理解、(中略)自分の行動を解釈する能力(中略)を必要とする」<sup>1)</sup>とトラベルビーが述べているように、「自己への気づき」を通して自分自身を治療的に用いていると考えられた。

これらのことから、【精神科看護師の気づき】とは、専門職としての知識や経験、看護師個々の感性を土台にしながら、専門職としてのケアに活かされていくものであると考えられる。そして、それは、自己洞察という自己への気づきを通して、専門職としての個人のあり方に発展をもたらすものであると考えられた。

## VII. 結 論

1. 【精神科看護師の気づき】は「気づきを生み出す力」「患者のケアに発展していく気づき」「自己への気づき」から成り立つことが明らかになった。
2. 3つの構成要素は相互に関連しながら循環する思考過程であり、看護職としての成長を促していくことに特徴があると考えられた。
3. 【精神科看護師の気づき】とは、知識や経験、看護師個々の感性を土台にしながら、ケアに活かされていくものであると考えられ、自己洞察という自己への気づきを通して、専門職としての個人のあり方に発展をもたらすものであると考えられた。

## 引用・参考文献

- 1) J. トラベルビー，長谷川浩・藤枝知子訳：人間対人間の看護，医学書院，1974.
- 2) P. ベナー，早野真佐子訳：エキスパートナースとの対話―ベナー看護論・ナラティブス・看護倫理，照林社，2004.
- 3) 石橋照子：精神科看護師による身体合併症への気づきのプロセス―修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて，日本精神保健看護学会誌 15 (1)，104 - 112，2006.